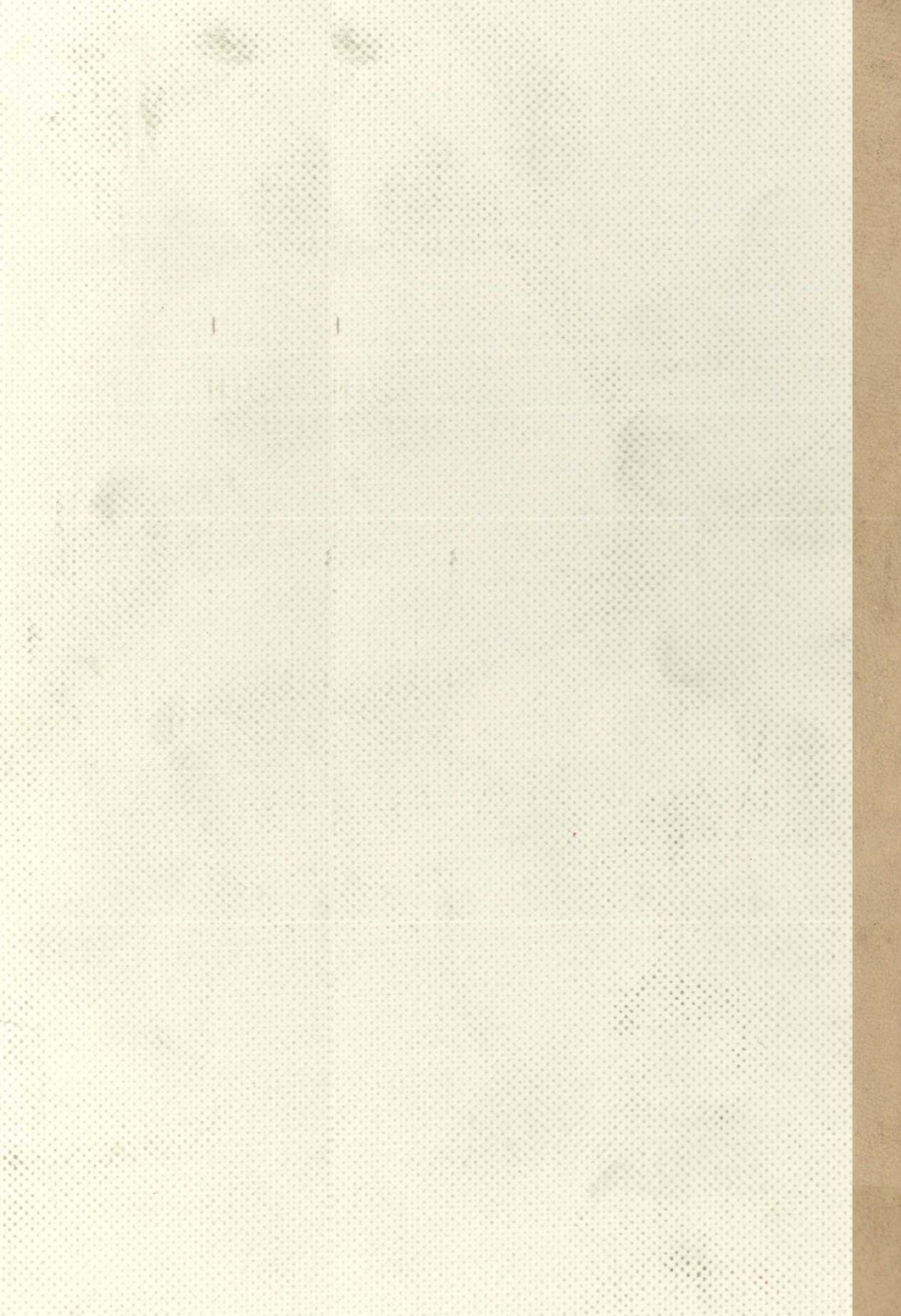
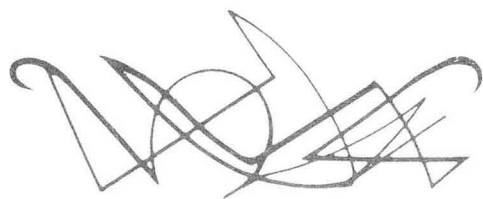






日本現代文學全集・講談社版 72

---

# 尾崎士郎集 坪田讓治

|   |   |     |
|---|---|-----|
| 編 | 集 |     |
| 伊 | 藤 | 整   |
| 龜 | 井 | 勝一郎 |
| 中 | 村 | 光夫  |
| 平 | 野 | 謙   |
| 山 | 本 | 健吉  |

日本現代文學全集

72

尾崎士郎・坪田讓治集

編集

伊藤 整  
龜井 勝一郎  
中村 光夫  
平野 謙吉  
山本 健吉



昭和42年8月10日 印刷

昭和42年8月19日 發行

定價 600圓

© KÔDANSHA 1967

著者  
尾崎士郎  
坪田讓治

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽 2-12-21  
電話東京 (942) 1111 (大代表)  
振替東京 3 9 3 0

印刷 大日本印刷株式會社  
寫真 株式會社 興陽社  
版印 大製株式會社  
製本 株式會社 岡山紙器所  
製函 株式會社 第一紙藝社  
背革 小林榮商事株式會社  
表紙 日本クロス工業株式會社  
クロス 日本加工製紙株式會社  
繪用紙 本州製紙株式會社  
口用紙 安倍川工業株式會社  
本文用紙 三菱製紙株式會社  
見返し用紙 神崎製紙株式會社  
扉用紙

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

尾崎士郎集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

人生劇場（青春篇）……………五

鵲鴿の巢……………一七三

河 鹿……………一七五

悲劇を探す男……………一七六

蜜柑の皮……………一九四

倭的日記……………二〇二

作品解説……………淺見 淵 二六

尾崎士郎入門……………安 田 武 三三

年 譜……………三

参考文献……………四四五

# 坪田讓治集 目次

## 卷頭寫眞

## 筆 蹟

|        |    |
|--------|----|
| 子供の四季  | 二七 |
| 正太の馬   | 三六 |
| 土に歸る子  | 三九 |
| 一匹の鮎   | 四四 |
| 子供のけんか | 四〇 |
| 母のことなど | 四三 |

|         |           |
|---------|-----------|
| 沖繩の子供たち | 四五        |
| ふたりの友だち | 四八        |
| 一日一分    | 四九        |
| 童話の考え方  | 四〇        |
| 現實と空想   | 四二        |
| 人生と生活   | 四三        |
| 作品解説    | 淺見 淵 四二〇  |
| 坪田讓治入門  | 十和田 操 四二七 |
| 年 譜     | 四三八       |
| 参考文献    | 四四六       |

尾  
崎  
士  
郎  
集

落葉滿  
楊不啼  
紅  
亭

## 人生劇場

青春篇

## 序 章

## 「三州吉良港」

一口にさう言はれてゐるが、吉良上野の本據は三州横須賀村である。後年、伊勢の荒神山で、勇ましい喧嘩があつて、それが今は、はなやかな傳説になつた。そのときの若い博徒が、此處から一里ほどさきにある吉田港から船をだしたといふので、港の方だけが有名になつてゐるが、しかし吉良といふ地名が現在何處にも残つてゐるわけではない。

その、吉良上野の所領であつた横須賀村一圓で「忠臣蔵」が長いあひだ禁制になつてゐたことは天下周知の事實である。これは一面、吉良上野が彼の所領においては仁徳の高い政治家であつたといふことの反證にもなるが同時に他の一面から言へば一世をあげて嘲罵の的となつた主君の不人氣が彼の所領の人民を四面楚歌におとし入れたこともたしかであらう。

まつたく「あいつは『吉良』だ！」といふことになる旅に出てさへ肩身の狭い思ひをしなければならなかつた時代があるのだ。しかし、さうなれば、こつちの方にも（忠臣蔵なんて高々芝居ぢやねえか）、——といふ氣持が湧いてくる。（うそかほんとかわかるものか、あんなものを一々眞にうけてさわいであるろくでなしどもから

難癖をつけられてゐるうちのおとのさまの方がお氣の毒だ）——

三州横須賀は肩をそびやかしたのである。相手にしないならしくてもいい。そのかはり日本中の芝居小屋で「忠臣蔵」がどんなに繁昌しようとも、この村だけへは一足だつて踏み入れたら承知しねえぞ！

平原の中にぼつねんと一つ、置きわすれられた村である。（村といつても矢作古川の沿岸にあつて前には吉田といふ港をひかへてゐるだけに運輸灌漑の便はおのづから交通の中心となつて、何時のまにか、上町、下町、法六町、吹貫町といった風に村全體が一つの市街に構成されてゐたが）

しかし、さすがに明治になつてからは片意地な理窟をいふものもなくなつてしまつた。それで村一ばんの劇場である本明座で、忠臣蔵が隣の緒切つて興行されたことがある。すると思ひがけないことがおこつた。判官切腹の場であつたが、大星由良之助が勢ひこんで花道をかけてくる途中で、ひどい胃痙攣をおこしてしまつたのである。

「力彌、——由良之助は？」

「いまだ参上——」

と言つてから、ちよつと間を置いて、力彌に扮した色の生白い俳優が「つかまつりませぬ」といふところださうであるが、そこで、かんじんの由良之助が動けなくなつてしまつたのである。舞臺では内匠頭が腹に刀を突きさしたままのすがたで痺れをきらしうんうん唸りつづけてゐるのに由良之助が花道でへたばつてしまつたのは仕方があるまい。

芝居はこれでめちやめちやになつた。これはいふまでもなく吉良上野の靈が祟つたのだといふことに衆議一決した。そこで、改めて丁寧な慰靈祭が行はれ、興行がやりなほしになつたが、このことが近村につたはると大へんな人氣をあふつて初日は小屋の割れるやうなさわぎになつた。ところがまたしてもそのどさくさのあひだに樂



屋うらから火が起つた。小屋は大混雜のうちにみるみるうちに焼け落ちてしまつた。

忠臣藏の興行がながいあひだうちたえてゐたのはそれがためであるといふ。しかししばらくたつと一人の男がうまいことを考へつゝた。つまり、吉良上野の出る場面だけをすつかりカットしてしまつたらいいぢやないかといふのである。吉良を出さなくたつて何故内匠頭が切腹しなければならぬかといふくらゐのことは見物にだつてわからぬ筈はあるまい。——すると、もう一つ積極的な意見があらはれてきた。「それもさうだが、そんならいつそのこと内匠頭をわるものにしてしまつたらどうだ?」

その次の興行では、芝居小屋の前にしな縄を張つた御堂がつくられた。うやうやしく吉良上野の靈がまつられたのである。それ故、木戸銭をはらつた人たちはその前に立つてばんばんと拍手を鳴らした。

舞臺の上では俳優がすべて「師直」を誹謗する言葉を禁ぜられたのは當然である。そこで刃傷の場面がなくて幕があくとすぐ内匠頭が「無念!」とさけんで切腹するといふ妙な芝居が出来上つた。

この「吉良港」で、ある朝——村の遊俠兒である太田仁吉が伊勢の喧嘩で死骸になつてかへつてきた。霧のふかい朝であつたが、村はその噂で湧きかへるやうだ。下町通りにある寶泉寺の廣場にあつまる人の數はだんだんふえてくる。まるで、吉良邸からひきあげる赤穂浪士を見るやうな思ひで——その中に、村の旦那樂のひとりである辰巳屋の瓢太郎の蒼ざめた顔が今にも泣きさうになつてぶる顔へてゐるのが際立つて見えた。

まつたく瓢太郎は悲しかった。これは、人情ぶかい彼の氣質のためだとも言へるが、しかし、仁吉ときつかり結びつくことによつて、とにかく村境までは肩を張つてあることの出来た彼が急にうしろ桶を失つてしまつたためであると言へないこともない。(それほど村には小さいやぐざが張りあつてゐたのである。そして彼等の

勢力がそれぞれのかたちで、旦那衆がたの生活に影響してゐた) かういふ現象は、この村がながいあひだ孤立に置かれてゐた結果にちがひないが、しかし、瓢太郎にしてみれば彼が途方もなく仁吉をすきであつたといふ單純な解釋だけにあてはめることの方が一層適切である。

しかし、いづれにしても仁吉の死は村の形勢を一變した。荒神山のはなやかな大詰は吉良一圓においての博徒の淋しい大詰でもあつた。

まもなく仁吉一家はちりぢりになつて、ケチな刃傷沙汰で監獄へゆくものもあれば、他國へ流浪するものもあり、意氣地ない連中だけが町で小さい商賣をはじめた。仁吉から多少の血統をひく常吉といふ男が瓢太郎の世話をうけて、法六町にある辰巳屋の借家のひと棟に「吉良常」と名乗る小料理屋を營んでかすかにやくざ稼業の名残りをとどめてゐたとは言へ、しかし、もう「吉良常」に幅をきかせる時代ではなかつた。

それ故、うすぎたない襦袍を着て、店頭にしよんぼり坐つてゐる「吉良常」のすがたは、誰の眼にも痛々しく映つた。

仁吉が「吉良常」のことを「ぼんち」と呼んでゐたので、それが何時の間にか彼の通り名になつた。子供達は、冬でも素足であるいてゆく彼のうしろから、

「ぼんちたびなし」

と言つてはやしたてた。すると、やうやく二十をすぎたばかりの「吉良常」は眞赤になつて子供たちの逃げてゆくあとを追つかけてきた。子供たちの中によくないやつがあて、何時の間にか「ぼんちたびなし」を終ひから言ふくせがついてしまつた。それが可笑いよりもかへつて物哀れに聞える。そして、寒さうに肩をすばめてゐるいてゆく、この氣のいい、人好きのする男のうしろすがたを一しほわびしくさせたのである。

瓢太郎は、ときどき滯納した家賃の言ひわけにやつてくる「吉良

常」をみると露骨に顔をしかめてみせた。

「仁吉はえらかつたな！」

——さういふ瓢太郎の厭味は「吉良常」には一ばん辛かつたらしい。その頃、荻の製造業をお上に返上して、肥料問屋をはじめてゐた瓢太郎はすでに五十をすぎてゐた。それ故彼の頭の中は八つになつた忤の瓢吉のことで一ぱいだった。

辰巳屋の屋敷は法六町の半分を領有してゐる。土塀の内側には松の並木がならび、うしろは宏大な竹藪が晝でもうすくらく煙つてゐた。

瓢太郎は朝起きると、瓢吉をつれて屋敷の中をひとまはりすることを日課のやうにしてゐたが、あるとき、うら庭の隅にある高い銀杏の木の下までゆくと、何か思ひだしたやうに立ちどまつた。

「瓢吉！」彼は元氣のいい聲で忤を呼んだ。「この木へのぼつてしろ！」

「この木つて、どれでえー！」

「銀杏の木だ」

「高くてのぼれんがえ」

「のぼつてみんでわかるか、——おとツつあんが見とつてやる、のぼれ！」

神經質な瓢吉は父親の様子が何時もとちがつてゐることを直感すると慌てて下駄をぬいた。そして、裸足になつてすぐのぼりはじめたが、銀杏の木は下廻りが、やつと彼の両手をひろげなければ抱へられぬほどの太さである上に、手がかりになる枝がないので、瓢吉の小さい身體がべつたりと吸ひついたと思ふとすぐすべり落ちた。同じことを何べんくりかへしても同じだった。

「あかん！」

瓢吉の澄んだ眼が哀れみを乞ふやうに顫へながら今にも泣きさうな顔になつた。

「何があかん、——ほんなことかどうか、もつとしつかりやれ！」瓢吉は半分べそをかきながら、しかし、同じことを何べんとなくくりかへしてゐるうちにやつと兩足を地上からはなして、銀杏の幹にすがりつくことができるやうになつた。

「よし！」

と、瓢太郎が叫んだ。「一錢やるぞ、遊んで来い！」

瓢太郎はにこにこしながら瓢吉の手の届いたところに小刀でしるしをつけた。「毎日やるだぞ、あしたはてつべんまでのぼれ」

「のぼる」

と瓢吉が答へた。

「のぼつたら何でも買つてやる」

「鐵砲を買つてくれるかえ？」

「買つてやるぞ」

——これが、瓢太郎の考へついた教育法だった。それ故、毎日同じことがくりかへされた。小刀の目じるしはだんだん上へのぼつていつてもう瓢太郎の手の届かぬところまでになつた。そして一ト月経たぬうちに、瓢吉は猿のやうなあざやかさで頂上までのぼつてしまつた。

「おとツつあん！」

上から、勝ちほこつた小さい聲が聞えてきた。瓢吉はうれしきで胸がわくわくしたのが、しかし瓢太郎のよろこびはそれどころではなかつた。

「手がはなせるぞー」

上から瓢吉が叫んだ。

「よし、はなしてしろー！」——瓢太郎が下から手をふつてみせた。(彼には忤のすがたが蟬のやうに見えた)

「えらいぞー」

瓢太郎が手をたいた。「そこから何が見える？」

「何でも見える——」

「言つてみろ！」

「馬が見える」

「馬が何處にをる」

「橋の上にをる」

（一臺の驛馬車が春の陽ざしをあびて、彼の視野の中をまっすぐに走つてくる）——遠い平野のはてに點在する村が緑のかたまりのやうに見え、そして、彼の住んでゐる町さへ、今は彼の眼の下にうづくまつて、それは彼よりもずっと小さくなつてしまつた。

「萬歳！」

と、瓢吉が腹一ぱいの聲で叫んだ。何とうきうきした氣もちではないか。遠い山が雲とすれすれになり、その下に見える鎮守の社は手をはなしただけですぐ飛んでゆけさうだ。

そのとき、下から瓢太郎の聲が聞えてきた。「しつかりとまつとれ、手をはなしちやいかんぞ！」

瓢吉はびくつとして下を見おろした。親爺が片肌ぬぎになつて銀杏の幹に兩手をあててゐるのが見えた。すると、かすかな波動が梢の方へつたはつてきた。徐々にだんだん強く——それも最初は風があたるくらゐの感じだつたが、まもなく高い銀杏の木が前後に大きくゆれはじめた。

「しつかりとまつとれ！」

瓢太郎は絶えず下から聲をかけた。瓢吉の眼の前では、あらゆるものがうごきだしたのである。そして、もう何を見ることもできなくなつてしまつた。

「おそげえ（怖いといふ意味）、おそげえ！」

瓢吉は夢中になつて叫んでゐるばかりだ。（幹がゆれるごとに全身の力がぬけて今にもふるひおとされるやうな氣持で——）

「おそげえことはないぞ、——おりて来い！」

瓢太郎は汗びつしよになつてゐた。そして、泣きながら、やつ

とおりにきた瓢吉をみると、すぐに、

「鐵砲を買つてやる、来い！」

さう言つて先に立つてゐるきだした。

瓢太郎はこのとき、すでに自分の人生が終りにちかづきつつあることを知つてゐたのである。

それ故、彼の頭は瓢吉を育てることでは一ぱいなのだ。

彼は若い頃からひどい胃弱で苦しんでゐたが、それが難病の胃癌だといふことがわかつたのは四十をすぎてからである。半年あまり彼は病院を轉々としてくらしてゐた。しかし、何處へ行つてもよくなる徴候は見えなかつた。それよりも田舎の病院生活でわるいことをおぼえてしまつた。それが、あるときの應急手當でモルヒネの注射をしたことだつた。それが、今となると、半日もモルヒネなしでくらすことができなくなつてゐた。最初のうちは、知合ひの醫者の手をわづらはしてゐたのが、そんなことではもう間に合はなくなり、町の藥種屋が一週間に一ぺんづつ、こつそりモルヒネの瓶を持つてくるやうになつた。今は自分の手の届く範圍で注射する場所をさがすのさへ困難になつてきた。注射のあとにはすぐに赤黒く瘤のやうにかたくなつて、ときどき疼くやうに痛みだした。

モルヒネが切れかかると、目まひがして、頭がぼうつとなり、手がしびれてすぐ眠くなつた。

仕事がものうくなり、氣力がめつきりおとろへてきた。

瓢太郎は誰に對しても、まるで別人のやうなやさしい男になつてしまつた。

「瓢吉——えらくなれえ、貴様はこの村の奴等の眞似をするな、何でも無鐵砲なことをしなきやあ、えらくなれえぞ！」

さういふときに彼はきつと仁吉のはなしをして聞かせた。はなしであるうちに仁吉はだんだん現實の人間から遠ざかつて、すばらしい英雄になつてしまつた。それが瓢吉の頭に反映すると、仁吉は何時も緋緋の鎧を着て白い馬に乗つてあらはれてきた。

瓢太郎が、さう言ふのも無理がないのだ。三十をすぎると、この村では誰も彼もひねこびれた老人のやうになつてしまふ。物資がゆたかで、生活に苦しむ必要のないせゐもあるが、山にかこまれた平原に特有な氣候の和<sup>やわ</sup>かさが村びとの野心を性慾にだけ限定してしまつたからだと言へないこともない。まつたく一夜の秋の夜祭で短い夜を楽しむために一生を棒にふつてしまふやうな若者がざらにある。(矢作古川には、春近くなると、赤ん坊の死體が、うき袋のやうにばかばかうかんでながれてゐるのを毎日のやうに見たといふはなしを得意になつてしやべつた老人があるがこいつはどうだか、

辰巳屋の屋敷が賣りに出たといふうはさがつたはつたのは、瓢太郎の身體がすっかりいけなくなつた頃だ。事實はそれほど窮迫してゐるといふほどでもなかつたが、しかし、そのうはさはまもなく一つ一つかたちの上にあらはれてきたのである。先づ、裏の竹藪が賣りはらはれた。屋敷をかこんでゐる松の並木が伐りとられた。それから法六町に軒をならべた辰巳屋の貸家までも住んでゐる男が知らぬ内に、何時の間にか大家の名義人がかはつてしまつてゐるといつた風に――。

かういふ慌<sup>あわ</sup>しい變化は小さい瓢吉の眼にもありありとうつてきた。まつたく誰にしたつて落ち目になつたが最後だ。瓢太郎が權柄<sup>けんぺ</sup>つくな顔をして大きな口をきいてゐたあひだは村ちゆうが彼に親しみをよせてゐたのに、彼の方が人なつかしい靜かな男になると妙なものでこんどは誰も彼も逆にじりじりと彼からはなれていつた。

ある晩、彼の若い女房であるおみねが(おみねと彼とは二十も年がちがつてゐた)この村から一里ほどはなれてゐる西尾在の實家へ行つての<sup>かへり</sup>みちを村ざかひの堤防の上で、ひとりの男にうしろから組みつかれた。彼女は極度のおそろしさのために大聲でわめきながら、手に持つてゐた蝙蝠傘で相手の男をめちゃくちゃになくつ

たが男の力が強かつたのでひとつき胸を小突かれるとそのまま堤防をころころところげおちて泥田の中にはまつてしまつた。おみねが歸つてきてからそのはなしを黙つてきいたあとで、瓢太郎は兩腕をわなわなと顫はせながら不審なところをこまかに訊問した。あくる朝、村はづれの「番太小屋」のあとに住んでゐる「甚」といふ泥鰻<sup>どろも</sup>をすくつてくらしてゐる男が、こんなものが落ちてゐましたがもしやお宅のおかみさんでは、と言つて、堤防の下の草原にあつたといふ簪<sup>かんざし</sup>を持つてやつてきた。おみねがおそれられたのは夜中だといふのだから、甚がそんなことを知つてゐる筈はないし、それに、甚は長いあひだ瓢太郎から蟲けらのやうに扱はれてゐた男だから、よしんば、その簪に見おぼえがあつたとしたところで、わざわざ持つてやつてくる筈がない。

それ故、甚が來たことはますます瓢太郎をいきり立たせた。彼は甚の表情の中に「ざまを見やがれ!」といふ卑しい好奇心のひらめくのを感じたのである。さうなると、もう居ても立つてもみられなかつた。

その日の午後――髭をはやした駐在所の巡查が甚のうちへやつてきて、裏で泥鰻をさいてゐる彼を、無理矢理につれていつてしまつた。瓢太郎が訴へたのだ。しかし、結果はわかつてゐた。駐在所から放免されてかへつてくると、甚は、まるで見てきたやうな嘘を村ちゆうへ吹聴して廻つた。それによると、その夜、堤防の上でおみねにおそろひかつたのは一人や二人の男ではなかつた。

「何しろ、お前、――あのおかみさんが蝙蝠傘をもつて大聲に怒鳴りながらなぐりかかつたとおつしやるんだがよ、へえ。――若<sup>わか</sup>え女がそんなときに聲が出るもんかね」

甚は、いかにも渡りものらしい齒ぎれのいい口調で、うすぎたない興味を相手の心に唆<sup>そ</sup>りたてた。

甚が怒るのも無理はなかつたが、しかし、それにしても何と哀れな瓢太郎よ! (まつたく人間は落ち目になるものではない)――

女房のことで騒ぎたてた亭主のみじめきは古往今來何處へいつても變りはないのだ。それ故、陷阱におとしこまれたものは甚ではななくて瓢太郎だつたといふことになる。

村において辰巳屋の人氣はかくのごとくして地に墮ちた。それが瓢吉の生活の上にさへ濃い翳をおとしはじめたのである。

「やい、瓢丹、待て！」

ある日、村はづれの學校からかへつてくる道で、瓢吉が「番太小屋」の前の廣場までくると、甚の長男である十四になる三平が、道中待ち伏せてゐる雲助のやうな顔をしてとび出してきた。

三平のうしろには村の惡たれ小僧が四五人、學校の鞆をぶらさげたままの恰好で立つてゐる。

「やう、こつちへ來やがれ！」

三平の權幕にすつかり怯氣だつてしまつた瓢吉が、泣きさうな顔をして立ちどまると、三平はわざと口をとがらしながら、瓢吉の胸倉をとつてひきずつていつた。

廣場の向う側は田圃だ、——そこだけ土がくづれて崖のやうに傾斜してゐるので、往來からは見えなかつた。早春の陽ざしがきらきらとうすい氷にうかんである。瓢吉の眼には、今、そこから歸つてきたばかりの學校の校舎が見え、その前の乾いた往來を吉田港の方へ、白い砂煙りを立ててのろろういてゆく荷馬車が見えたが、すぐ涙がにじんで視野が曇つてしまつた。

「名前を言へ！」と、三平が、たぶん村芝居か何かでおぼえた仕草にちがひない、——左肩をそびやかしながら手に持つた棒きれを前へつき出した。

「瓢吉だがな」と、彼が答へると、急にうしろにうづくまつてゐる仲間の方を向いて、

「おい、瓢吉だげな、——瓢吉ぢやねえ、瓢丹づら（だらうといふ意味）」

さう言つてから、彼は二三歩あとへしりぞいて、いかにも小面愴

さうに顔をしかめて、

「やあい、瓢丹が泣くぞ、泣く、泣く、やあい！」

子供たちが一せいに嘲したてた。すると、三平が、

「やい、瓢丹、三年のくせに生意氣だぞ！」と叫んだ。

「——お前おりに文をやつたづら、やあい、おりんと夫婦になれ、また瓢丹が産まれるぞ！」

（三平は五年生だつた。おりんは下町のすし屋の娘で三平と同級生だつた。親父が早く死んでおふくろ一人の水稼業の家に育つただけに、子供にしてはませてゐるし、華美な丈長をかけたなり、袂の長い羽織を着て學校へかよつてくるので、すぐ人の眼につく、だから、白壁のらく書きは大抵おりんのわる口にきまつてゐた）

しかし、三平の言葉は、臆病な一少年の心に彼の最後の誇りと名譽のために戦ふ勇氣をふるひおこすに足るものであつた。瓢吉は夢中になつて三平に組みついていつた。三平はむしろさう來ることを待つてゐたらしい。彼は瓢吉の頬つべたを一つぶんなぐると、すぐに敵の兩腕をねちあげてうしろへ倒してしまつた。その上へ馬乗りになつた三平の足へ瓢吉が噛みつく、それをはずすとこんどは三平が上から瓢吉の頭へかじりついた。瓢吉は頭がじいんと鳴つてもう抵抗する力をうしなつてしまつた。街道すぢの「番太小屋」の向ひにある駄菓子屋のおかみさんが瓢吉の泣き聲におどろいて駆けつけたときには瓢吉の首すぢには赤く血がにじんでゐた。

「さあ、言へ！言へ！おりんに文をやつたづら、言へばかんべんしてやる」

三平はあくどいことばでからかひながら、しかしうしろへねぢあげた瓢吉の手は決してはなさうとはしなかつた。おさへつけられてあるうちに、瓢吉にはほんたと自分が何かわるいことをしたやうな氣がしてきた。甚のうちの裏から、甚の女房がちよつと顔をだしたがすぐひっこんでしまつた。

そこへ、反對側の畦道の方から不意に人の叫び聲がした。

「野郎、大概にしておくもんだぞ！」

さういふ叫び聲と一しよに三平は横つ面を一つはりとばされた。慌てて顔をあげると、朝からやけ酒でも呷つてゐたのだらう。眞赤な顔をして立つてゐるのは、まぎれもない、「ぼんちたびなし」の「吉良常」だった。

何しろ子供の喧嘩にほんたうの俠客が顔を出したといふ話はあまりあるまい。三平をけしかけたやつが甚であるにしろ、とにかく損をしたのは「吉良常」にきまつてゐる。彼の胸の底にはまだ昔の旦那衆に對する「仁義」がほのぼのと煙つてゐたのだ。それ故、彼は格別、辰巳屋に義理を立てるつもりではなかつたが、しかし、瓢太郎の仲の上に甚の仲が馬乗りになつてゐるなぞといふことは彼の道徳と處世法の中には決してあり得べからざることだつた。こいつは善惡の問題ではない。強弱の問題でもない。小さいやつと大きいやつの問題でもない。唯、町の旦那衆と渡り者との問題なのだ。——「吉良常」がさう考へたかどうかは疑問であるが、とにかく、彼はその晩、「甚」親子をつれていつて瓢太郎の前でべこべこお辭儀をさせた。

「吉良常」のやつたことはまつたく立派だつた。だが、甚にしてみれば、これほど難癖をつけるに都合のいいことはあるまい。甚は昔の親分である「吉良常」にがみがみ言はれたあとで外へ出てくると思ひまじさうに何べんとなく唾液を吐いた。

——なあ、おい！ 赤ん坊の腕をねちあげて男を賣つた親分を見たことあるめい！ へつ、馬鹿にしてゐやがる。

甚はその晩、上町の居酒屋で、馬方のやうな奴等ばかりゐる前で、一杯機嫌でどろをまいてゐた。しかし、瘦せても枯れても「吉良常」である。彼のことを正面から悪く言ふことができないとすれば、こいつは笑ひものにしてしまふにかぎる。

「吉良の仁吉さんが泣くぞ」と、甚が言つた。「かりそめにも、——なあ、おい！ さうだづら、自分の血すちをひいた男が子供の喧嘩

を買つて出て大見得を切つたと聞いたたら、うかれ節の文句ぢやねえが、地獄で肩身が狭からう」

甚はしまひの文句は節をつけてうなつた。

しかし、辰巳屋の奥の部屋では、モルヒネが利いてすつかりいい氣持になつた瓢太郎が、かんかんになつて怒つてゐた。その前には瓢吉がべそをかいて坐つてゐた。

「意氣地のねえやつだ、——こんど負けたら家へ入れねえぞ！」

「もう、あんな賤しい子供たちと遊ぶんぢやないよ」

と、おみねが横合ひから言つた。（瓢吉はその日、泣きながら家へかへつてくると、すぐ臺所の柱へしぱりつけられたのだ）——これが瓢太郎のスパルタ教育だつたが、しかし彼はあきらかに原因と結果とをはきちがへてしまつた。といふのは、瓢吉を無鐵砲で勇敢な男に、仕立てあげる前に、否さうするために彼自身を途方もない無鐵砲な男にしてしまつたからである。

（モルヒネが利いてゐるときとさうでないときの瓢太郎とはまるで別人のやうだ）

「まるで尻尾をふつてる犬みたいな野郎どもだ！」

彼は、村全體が自分に挑みかかつてくるやうな氣がした。だから、彼がさう言つて村人を罵るときには、決して、一人や二人の男を目當てにしてゐるのではなかつた。（彼に言はせると、この村には伸びやかな生きのいい青年は一びきだつてゐやしないのだ。どいつもこいつも小ずるくして正面から口のきけない、——そのくせ、常に小さい打算と物わかりのよさとを裏とおもてに縫ひ合はせてゐる小器用なやつばかりだ）

しかし、かういふ解釋はある意味で若き日の瓢太郎自身を語つてゐると言へないこともない。たとへば、彼等が犬であるにせよ猫であるにせよ、これ等の動物が「さかり」の季節にしめす情熱と來たら大したものではないか。

おりんの家には、若い母親をめあてに一里さきから白いちりめん

の兵児帯を腹一ぱいにしめて月夜の道に牛の皮の雪駄をちやらちやら鳴らしながら、村の若い衆があつまってくる。

辰巳屋の母屋ではひと晩おきに、風呂が立つ。昔からの習慣で、村の古馴染が、

「今晚は——」

と言つて裏木戸からはいつてくる。大抵腰のまがつた老人ばかりで、彼等は杖を縁ばたに立てかけ臺所のうすぐらいランブの下に行儀よく坐つて順番のくるのを待つてゐる。

(旦那の家で風呂がもらへるといふことは未だに老人たちにとつて一つの誇りだつた)

臺所と板戸一つで仕切られてゐる廣い佛間では一ト月に一べんぐらゐの度數で「百萬遍」の催しがある。

もう秋に近い肌ざはりのひやりとする晩だつた。氣候のせゐでもあるが、そとはいひ月夜だし廣間には十人あまりのおぢいさんやおばあさんが、先代から辰巳屋の世話をうけて屋敷の地つづきに建てられた地藏堂に住んでゐる尼僧の了諦さんをまん中にして、「なんまんだ」「なんまんだ」と口々に調子をそろへて大きい數珠をつまぐりながらまはしてゐる。——佛壇にならんでゐる蠟燭の光が人々の顔の上に親しみぶかい翳をきざんで、部屋の中はひそやかに、靜かな幸福で一ぱいだ。

奥の間では、瓢太郎が、彼の讀んだ小説本の中から自分の氣に入つた勇ましいところだけを彼一流の解釋に嘘八百をまじへて瓢吉に聞かせてゐる。彼の話す物語の本體は實を言へば二つしかなかつたが、しかし、彼は何時の間に自分その主人公にしてしまつてゐるので、毎晩同じ話で筋は二つがごちやごちやになり、ときに應じて變つてゐた。一つは空を飛んでゆく男の話でその男が人の知らない國を一巡して村へかへつてくると、悪いやつにだまされて非業の最後をとげる。すると、もう一つはその男に一人の子供があつて、

その子供がまた、惡ものにたばかれて何十年か牢屋へはふりこまれる。忤は牢屋の中で奇妙な老人にあつて、その老人から實の埋められてゐる遠い島を貰ふことになる。もうしめたものだ。そいつは劍道の達人だから、牢屋をぬけだすとたちまち大金持になつて、惡ものをみんな殺してしまひ、村を買ひ占めて、土地の大親分になるといふのである。(この話の出所が、「和莊兵衛」と「巖窟王」であることを知つたのは瓢吉が中學へ入つてからであるが——)

聞いてゐるうちに瓢吉は早く親父が誰かに殺されてしまへばいいと思つたほどである。彼は鐵砲も持つてゐたし、サーベルも持つてゐたし、だから今や恐るるものは何一つとしてないではないか。瓢吉は胸がわくわくするやうな氣持で、ブリキ製の空氣銃をもつて臺所へ出てきた。(もう百萬遍がすんで、がやがやさいわいである人の聲が樂しさうに聞えてきたからである)

老人たちは一人一人上り框に着物をぬいで土間にある風呂へ入つてゐるところだ。そのとき、瓢吉の眼に「おりん」が老人たちのうしろにしよんぼり坐つてゐるのが見えた。瓢吉はどきつとした。生したおりんの顔と華美な着物の色彩が一座の空氣と不調和であるだけにはつきりうきあがつて見えたのである。

「さあ、おりんちゃん、——早うお貰ひなよ」

ぼうつと顔を火照らした籠屋のおばあさんが湯からあがつてきた。おりんは黙つて立ちあがると、平氣で上り框に着物をぬいだ。それは不思議な瞬間だつた。鈍いランブの光の中で、帯の色彩がだらだらと虚空にゆれてゐる。瓢吉は何故おりんが着物なんかぬぐのだらうと思つた。

しかし、おりんはひよいいと腰をかめると着物と襦袢とをひとかさねにして、すつぱりとぬいでしまつた。そして白い肩がすうつと土間の方へ消えていつた。

瓢吉はまるで呼吸が詰るやうだ。身ぶるひがして仕方がない。彼はそのまま父の居間の方へかへつてきたが、「おやすみなさい」——

といふときにも、聲が途中でとぎれてしまつた。

——その頃、日露戦争がまつさかりだつた。召集令がまいにちのやうに下つて、村びとは出征兵士をおくることで大さわぎだ。(戦争熱がこのやうに誰の心をもあかるくうき立たせた時代はあるまい)

小學生は授業をやすんで鎮守の社に列をつくつてあつまつた。手に手に旗をふりながら、

あなうれし  
よろこばし

たたかひかちぬ——

と、腹いづばいの聲でうたふのだ、すると、軍服を着た若者が一人一人拜殿の前に立つて、一場の挨拶をのべるのである。誰の顔も感激に燃えて、泣いてゐるやつなんか一人もゐなかつた。みんなうれしくて仕方がないのだ。

人間が召集されると同時に農家から馬が片つぱしから軍馬として徴發された。社のうしろの森のかげになつた廣場には天幕が張られて、その中で軍醫が一びきづつ馬の皐丸をぬくのだ。廣場の隅には深い穴が掘られた。抜かれた皐丸が丁寧にその中へうづめられるのである。

天幕がとり拂はれたあとでも、そのあとの土ははじめじめしうす氣味がわるい。——それ故、瓢吉は馬より皐丸の方が氣になつた。彼はそつと自分の皐丸にさはつてみた。どうもこいつは妙なものだ。子供たちは皐丸をうづめた場所の前へあつまつてさわいでゐたが、しかし掘りかへしたあとの土の上を踏みつける勇氣のあるやつはゐなかつた。そこを踏みつけると土がむくむくとうごいて馬がとび出してくるやうな氣がした。

誰かが、今にあの皐丸から芽が出て、木が生えてくるといふ話をした。子供たちはみんなその説に賛成した。

「それだけん、どんな木が生えるづら？」瓢吉がそばにゐた同級生の、下駄屋の息子である信公にたづねると、信公は確信にみちた聲で言つた。

「そりやあ、馬だもん、——馬の木だづら」

しかし、誰も笑はなかつた。子供たちは、未だ馬の木を一本もみたことはなかつたが、信公にさう言はれてみると、ほんたうに馬の恰好をした木が伸びあがつてくるやうな氣がした。

「ほんなら——」と瓢吉が言つた。「人間の皐丸をうづめたら人間の木が生えるかえ？」

「そげなことは知らん！」  
と信公が答へた。

村は毎晩のやうにお祭りさわぎだ。戦争が終つたのである。(瓢吉の記憶では、戦争ははじまると直ぐにばたばたと終つてしまつたが)

提灯行列がある。祭禮がある。青年團は毎晩のやうに小屋をかけて芝居をやつてゐるし、生き残つた兵士が歸郷するごとに花火が立てつづけにあがる。その芝居といふのが大したもの、戦地からかへつたばかりの兵士が軍服姿で舞臺にあらはれると、下町の角にあるうどん屋の長男がうどんをもつて登場する。

見物は湧きかへるやうなさわぎだ。「やあ、六さんが出た」「六さんだ、しつかりやれ！」

しつかりやうにも六さんの役はそれだけだ。六さんが頭をかきながら名残惜しうに引き下ると、こんどは二人の兵隊さんがうどんを喰ひながら、お互に戦争の手柄ばなしをする。これで幕である。それがおもしろくつてたまらないのだ。

このどきくさの中で妙なことが持ちあがつた。村中切つての夜這ひの名人である床屋の肘鐵がこんどあたりしく辰巳屋へ女中奉公にきた「おひで」をものにしてしまつたのである。肘鐵は毎晩湯殿から忍んできた。眞夏のことで、彼はまつぱだかに汗一つで手拭を



肩からぶら下げてうらの藪つたひにかよつてくる。一風呂浴びて、それから忍び込まうといふ寸法である。

瓢太郎は一挺のピストルを持つてゐた。その頃では最新式の、環をまはすごとに彈丸が一つ一つとびだす六連發銃で——これは吉良の仁吉の身内であつた「どら猫の安」といふ男が人を殺して臺灣へずらかるるときにあづけていつたものだ。

たぶん、周囲のさわがしさが瓢太郎の心を刺戟したものだと思はれる。彼は一發やつてみたかつて仕方がなくなつた。それには夜中が一ばんいい。瓢太郎はある晩、こつそり起きあがつた。彼は中庭に向つてゐる雨戸をあけて濡れ縁づたひにそとへ出た。空はあかるかつたが、樹立の闇は深く、——起きてゐる人間は一人もゐない。

(瓢太郎は浴衣の右腕をたくしあげた)

母屋の隅にある納戸の方でかたかたと音がした。「もしか誰かが」と思つたがこんな真夜中に誰もゐる筈はないのだ。彼は右足を前に出し、いよいよ引金をひく準備をした。

裏敷の方で笹ずれの音がして、人が近づいてくるやうな氣持だ。(もしかしたら?)といふ感じがどつときたが、(構ふものか、やつつけろ!)といふ叫び聲が心の底から聞えた。

引金に指がふれると同時にだつた。闇の中をひとすぢの光が流れた。それから地ひびきがして、おそろしい音が彼の耳へすべりこんだ。兩足がわなわなと顫へたが、しかし、一瞬間、胸の中にぽつかりと大きな穴があいたやうな、すうとした氣持になつた。そのとき、彼の耳は遠くに人の悲鳴のやうなものを聞いたやうな氣がしたが、それよりも銃聲の餘韻の方が彼の耳に長く残つてゐた。まつたく彼の耳も頭もその一發の銃聲でうづまつてゐたのである。

瓢太郎はまだうすい煙を吐いてゐる銃口を下に向けたまま家の中へ入つてきた。おみねが眞蒼な顔をして蚊帳の中からとびだしたところだつた。

「瓢吉は寝とるか?」と、彼はおみねを見るとことさら落ちついた

聲で言つた。

「よう寝とりますか?」

おみねが不安におびえた眼で瓢太郎を見ると、彼はにやにや笑ひながらピストルを棚の上に置いた。

「起して来い!」

と瓢太郎が言つた。そして、とりみだしたおみねのうしろ姿を眺めながら瓢太郎は火鉢の前へどつかりと胡坐をかいて、湯の沸きつてゐる鐵瓶をおろした。

その晩——時鐵は、一杯ひつかけたあとですつかりいい氣持になつてゐた。まつばだかで手拭を肩にかけ、藪蚊をはらひながら竹藪を忍んでくると、まつたく鼻唄でもうたひたいやうな氣持ではないか。闇の中を手さぐりにあるいて(前の夜の記憶が彼の官能をべんに攻めたてた)——彼は、何時ものやうに禪をはづし、そいつを納戸の前にある物干竿の上にかけた。それから中の錠がはづしてある風呂場の戸をあけようとしたときだ。

ものすごい響がしたと思ふと、彼の眼の前が一べんにあかるくなつた。聲をたてるひまもなかつた。彼の頭に湧きかへつてゐたあらゆる想念が消え失せて、時鐵は全身が石のやうに冷めたくなつた。次の瞬間、彼は夢中で闇の中を走りだした。(瓢太郎が竹藪の方で妙な叫び聲を聞いたのはそのときだつた)

時鐵はまつたく自分がやられたと思つたのだ。それで、彼がやつと氣がついたときは全身がすり傷だらけになつて鎮守の社の前まで来てゐた。兩足が泥にまみれ、殊に左足は腿のあたりまで長い靴下を穿いたやうに、眞黒によごれてあるところを見ると、泥田の中をひた走りに走りぬけて來たものらしい。

一發の銃聲のかげに、かくの如き犠牲者がゐたといふことを瓢太郎は知る筈がなかつた。(それにしても月夜でなかつただけが、時鐵にとつてせめてもの幸ひであつたと言はねばなるまい)